慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人口理論と理想社会
Sub Title	
Author	小林, 宗三郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.5 (1939. 5) ,p.629(79)- 658(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19390501-0079
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390501-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人口理論と理想社會

小林宗三郎

一

イギリスにおける産業革命の進展は、生産力の猛烈な増加をまきおこし、國民の求める物的欲望を充分滿たし得る程の資財を提供したので、國家の前途は洋々として、國民の胸は理想と希望にどよめいた。各人は、自己の定めた目標に向つて、唯、邁進努力すればよい。それは、やがて、英吉利といふ一國全體の希望と合致して、個人も全體も共に、その目的を完全に滿たすことゝなるであらう。自己の職分に應じて得たる各人の利益は、やがて、萬人の利益と一致して、そこには何等の矛盾も撞着も介在せず、かくて社會全體の福祉はます。

こゝに樂觀的なアダム・スミスの「富の理論」が生じたのである。

「――人類に在つては、各人が最も不同の天稟を具へて居る事は相互にとつて有用である。乃ち取引し、交易し、交換する吾々人間全般の性向に依り、吾等夫々の才能に叶つた様々なる生産物は、云はゞ萬人共同の財産となり、そこから各人は他人の才能所産の中自己の必要とする如何なる部分でも購買し得る次第である。」(國富論)

しかるに、産業革命が深く四方に浸滲してゆくに從つて、社會に「一般的福祉」はもたらされずして、反對に「一

般的窮乏」が作り出されていつた。所有者と非所有者との限界は明瞭となり、大富豪と貧民が出現した。勞働者の頭腦にも、一體產業革命が何を意味するものであるか、又、生產の進渉にとつて、社會構成上に占むる自己の位置が、如何に重要なものであり乍ら、しかも自分達は永久に、他の構成層に移り行く機會がいかに甚だ劣しいものであるかといふことが、朧ろ氣乍ら、分り初めたのである。各社會構成層をとりもつ一條の絆は、やがて取り外されんとする。これに對して、彼等は、シバ〳〵無意識に反撥した。

しかも、かゝる無意識の反撥に、自覺の焰をそゝぎ込んだものは、「英吉利に於けるフランス革命」であつた。

この時にあたつて、自己の身邊に翳す暗影に懊惱しながら、くりひろげられてゆくフランス大革命の華々しき光景に恍惚と魅せられたる若きイギリスの「知識階級」は、打ち碎かれたる理想をば再び建設せんものと、博愛と正義と自由との上に礎かれたる社會への改革を熱望した。彼等は、その全存在を賭してまでも、人類全體の救濟を要望した。かくの如くにして、「政治的正義」の著者ウィリアム・ゴッドウインは、心からなる讃辭を捧げられ、彼の畫いた人類の自由と平等を確保したる社會は、熱情を以つて、喜び迎へられた。

かゝる渦卷く混濁と、怒濤の如き改革の叫びを凝視しつゝ、トーマス・ロバート・マルサスは、その筆をとり上げたのである。

彼の第一の論敵は、古きマーカンチリスト流の人口論者であつた。彼等は口をそろへて「人口を！先づ第一に人口を！」と叫ぶ。確かに、それは資本主義の黎明期にあつては、至當なる所言ではあつた。しかし、現在は、既に悲慘なる境遇に轉落してゆく幾多の人々を見受けつゝあるのである。現在ですら、社會は既にその全員を收容し得ずして、多數の貧困を作り出しつゝあるのに、しかも此れ以上に人口をふやす事は、果して可能であらうか。又人類にとつて幸福なのであらうか。それは、唯「貧困」の量を增大せしめて、彼等の憤激を尖鋭化せしめるに過ぎぬ筈である。こゝに、自國を中心として推行された產業革命に伴つて發生してゆく、貧困」に對する理論付けが必要となり、それに付隨して從來の「絕對的人口增加論」を修正する必要があつた。

マルサスの第二の論敵は、かゝる「人民の窮乏」を救濟するために、社會制度の根本的改革を斷行しやうとする急進的社會主義思想であつた。

現在の社會に於いては、誤れるものは分配であつて生產ではない。既に萬人に對して十分なる以上の富があるけれども、それは萬人の間に分たれてゐない。或者は餘りに多くを有し、他の者は少く、又は何ものをも有しない。こゝに「貧困」の眞因があるのである。新たなる社會に於ては、理性は總てかゝるものを變更するであらう。こゝに、社會制度の根本的改革が强調せられるのである。

しかし乍ら、果して、かゝる改革は——人爲的な改革は、永久且つ完全に人類を貧困の淵から救ひ上げることが出來るであらうか。それは、マーカンティリスト流の「人口增加論」が、單に人口の增加、從つて生產の增加がそれ丈けでは何等人類の幸福をもたらさなかつたのと同樣に、人類を支配する根本法則を無視したる一切の改革は、何等の效果も無いのではあるまいか。こゝに、フランス革命をもふくめたる一切の人爲的改革の無效なる事が、證明されねば成らぬ。

かくの如く、人類の幸福——社會の改善——貧困の原因、云ひ換へれば人類の運命そのものゝ探究は、やがて、「貧困」の理論的研究、及び貧困階級の眼覺めのいぶきとなつた「フランス大革命」に對する反對論の理論付をめぐつて「貧の理論」マルサス人口原理をば上梓せしめたのである。

かくて、一七九八年、社會思想の論壇に登場したマルサスは、先づ二つの公準を置く。

第一、食物は人類の生存に必要であるといふこと、

第二、兩性間の情慾は必要であつて、大體いまのまゝ變りがあるまいといふこと、

この前提が承認されたとしたならば、その結果は、一體どんなことに成るのであらうか。マルサスは、こゝに著名なる次の如き章句を示す。

「人口は、制限せられなければ、幾何級數的に增加する。生活資料は算術級數的にしか增加しない。數字のことを少しく知れる者には、前者の力が後者のそれに比してどれ程大きいかゞすぐわかるであらう。」

食糧は、一・二・三・四・五・六と增加してゆくのに對して、人口は一・二・四・八・十六・三十二と增加してゆく。こゝに、前述の公準からもたらされる人口と食糧の二つの不對等力は、何等かの形式によつて均衡せしめられなければ成らぬ。その結果は、人口の制限が强く且つ、絶へず、人類の頭上におちかゝつてくることゝなる。

「植物と動物とには、その結果として、種子の浪費と疾病と早死とがある。人類には窮乏と惡德とがある。」

貧困の眞の原因は、實に、人口法則と稱する古今を通ずる大自然法則の作用にあるのである。いかなる人類の努力によつても逃れ出づることの出來ない人口と食糧の一般的不均衡が、必然的に、罪惡と貧困をば、社會にもたらすのである。

それは、天帝の下したる大法則に基くものであるから、如何なる社會制度の改善も、如何なる矯激なる革命も、この支配から人類を救濟することは絶對に出來ないし、又、强ひて救ひ出さうとすることは、自然への、天帝への反逆となるのである。だから、罪惡と貧困とは人類が苦しみ續けなければ成らない宿命なのである。「政治的正義」

に畫かれたるが如き自由と平等とに滿ち溢れたる理想社會制度が萬一打ち建てられたとしても、「その社會は、幾萬世紀は愚か、三十年も經たない內に、唯簡單な人口の法則だけによつても滅亡してしまふ」ことは確實なのである。

「貧困」の原因は、社會制度にあるのではなくして、人口の原理といふ自然法則にあるのである。貧困は、人類にとつて、甘受せねばならぬ運命である。宿命である。

かくて、人類の幸福を增進させんとする從來の「人口增加論」も、人類の窮乏を改善せんとして叫ばれる「社會改革論」も、全ては人口原理を無視したる人爲策であつて、到底徒勞に過ぎぬものなのである。

かくて、マルサスは、貧困の發生並に、その存在の必然不可避性を主張する。がしかし彼が、かゝる宿命である「貧困」は、絶對にまぬかれることは出來ないが、之こそ「慈悲深き天啓」であると考へたことは注目すべきである。何となれば、「若し饑饉の衝動と、寒威の壓迫とがなかつたならば、野蠻人はいつまでも樹下の惰眠をむさぼつてゐるであらう」、からである。彼等が食物をあさり、小屋を建てゝ、おそひかゝる苦痛を逃れんとするその努力こそ、活動と進步の原動力なのである。故に、これ等の刺戟をばぬぐひ去り、即ち、「貧困」「罪惡」等一聯の人口原理より生ずる一切の弊害を除去することは、勿論人類にとつて幸福であるかも知れないが、それは窮極において、人類の未來への進步の胚子を悉くうちくだいてしまふことに成るのである。かくて、「害は努力を作るために必要であり、努力は精神を作るために、たしかに必要である」といふ事に成る。

「貧困」の宿命觀を强調するマルサスは、その初版人口原理を次の如き章句を以つて結んでゐる。それは、「貧困階級」の反抗の氣運をうちくだき、その宿命の中に努力せんことを人類に對する貢獻として、天帝への使命として命ずるのであつた。

「罪惡の世に存するは人をして失望せしめんがためではない、人をして活動せしめんがためである。吾等は何を苦しんでかそれに屈しよう、よろしくそれを排除すべきである。各自は、自分の罪惡を斷たんがために、又出來るだけ廣き範圍の人を導いて、それを斷たしめんがために、最善の努力を爲すべく、それが各自の利益たるのみならず實に各自の義務である。而して各自がよくこの義務を果し、益々賢明にその努力を正當の方向に進め、愈々その努力の效果を收めるならば、そしてその效果が大なれば大なるほど、恐らくは彼の心靈は愈々啓發せられ、愈々向上するであらう。而して、又實にこれが創造者たる神の意思を就す所であると云ふことが出來よう。」

スミスにあつては、自己の利益の追求が全體の利益となつたのであるが、マルサスにあつては自己の義務を果たすことが、全體の幸福を增進せしめることであつた。

それは、貧困を宿命と觀じながら、その責任を各個人の努力の上に課したのである。然もこの貧困の個人責任論は、再版に至るにつれて漸次明白となつていつた。

二

一八〇三年出版せられたる人口原理再版は、初版における冷酷無情なる、貧困に對する人類の絕對的宿命論を著しく緩和して、マルサスは三筋の岐路に立てる人の姿を示した。第一は貧困への道、第二は道德への道、第三は罪惡への道である。人類は兎もすれば、盲目的衝動にかられて、第一の道へと急ぐのが常である。こゝにマルサスは、彼等に呼びかけて、第二の道を選ぶやうにと慫慂する。が、その忠告に從つて、困難なる救ひの道へと進む者は、使途の言葉にもある樣に、甚だ數少きものであらうとは、マルサス自身も考へざるを得なかつた。

だがしかし、人口原理の作用として、人類が蒙らねばならぬ運命の內に、罪惡と貧困に並んで、「道德的抑制」を描入したことは、その效果が甚だ期待し難きものであつたとしても、少くとも社會の前途には一條の光明が、鄕き出したわけである。人類は、絕對的な罪惡と貧困の宿命から逃れて、現世に幸福を見出し得る可能性を與へられたわけである。これと同時に、マルサスが初版に、あれほど力說した社會改造の絕對無效論、貧困と罪惡の不可避的宿命論は、もろくも著しき讓步をなさねば成らなかつた。それは、初版人口原理を「陰慘なる科學」なりとして、社會の一部に猛烈なる反擊が生じたことにもよるであらうし、論敵ゴッドウィンと會見することによつて、マルサス自身が與へられた暗示にもよると云はれてゐる。

かくて、マルサスも、所謂「道德的抑制」の實現せられた、理想社會を畫がゝざるを得なくなつた。

「假りに例解の爲に、吾人が一つの社會の圖を描くことを許され……」と彼は筆を進める。

この社會では、即時的滿足の欲望に促され、しかも結局は差引苦痛が多いおそれのある一切の行爲は、義務の違反と考へられるのであるから、こゝに二人の子供しか養へぬ收入の人は、いかに愛慾に驅られたとしても、四人五人の子供を養はねば成らぬ樣な境遇の中に自らを追ひ込む樣なことは、決して許されぬし、又しないであらう。この戒愼が、道德的抑制なのである。そこで、萬一かゝる「戒愼的抑制」が一般社會に行はれるとしたなれば、かゝる戒愼を持續してゐる間に、結婚生活に入り、而して子供を生んだとしても、決して不幸に落入ることのない樣な收入が貯蓄されることゝなる。一方、勞働市場における供給の自制は、漸次賃銀の改善をもたらす。こゝに大家族を支持するに足る充分な貯蓄と勞銀が保持されて後初めて、人々は結婚生活に入ることゝなるが故に、極貧は一切社會から、その跡を絕つて、唯僅に、如何なる戒愼も先見も及ばないやうな全くの不幸に陷つた極く少數の人々を除く外、社會的福祉はもたらされ、理想社會へと近づくことゝなるのである。

現存社會に代る一切の社會建設は、全然無效にして徒勞であると主張したマルサス人口原理は、自ら理想社會を夢想したことによつて、確かに一歩後退したことは事實である。社會改造は可能である。最早、一切の社會變革を退けて、既存社會の恒久性を肯定せしめることは、マルサスの人口原理には出來なかつた。これは明かに、人間の理性の勝利を確認するゴッドウィンへ一歩接近したことゝなつた。本能は理性の前に席をゆづらねばならなかつた。

しかし乍ら、ゴッドウィンの理想社會とマルサスの理想社會とは、ヨリ良き社會の建設といふ精神と、その出發點においては同じであつたかも知れないが、その社會の持つ本質及び、その社會を建設する手段は、全く異つたものであることに、注意しなければ成るまい。

第一に、ゴッドウィンが描いたる社會は、暴力が漸次退けられ、理性のみが信頼せられる——云はゞ理性の完全なる支配によつて、一切の私有財産、一切の政治的支配が根絶した「無政府共産社會」なのである。然るに、マルサスにとつては、來る可き社會——否！人類が社會を形成する限りに於て、私有財産、社會上の不平等、從つて又政治的支配といふ所謂ゴッドウィンにとつては絶對に根絶せしめなければならないと考へられたる一切のものが、反對に絶對に必要なものだつたのである。何故なれば、人類の進歩と幸福の大半は、かくてその中から作り出されるが故であつた。

そこで、社會的不平等、私有財産、政治的支配のいづれもが、人類の社會形成にとつて除外することの出來ない要素であるとするなれば、この三本の支柱の上に立つた社會——云はゞ現在あるがまゝの社會を、その儘に恒久的なるものとして、然もその内から、往々生ずることあるべき「貧困」「罪惡」といふ一聯の「社會的弊害」を遂一摘出し得た曉に實現する社會こそ、マルサスにとつては、最も希望する「理想社會」なのである。彼にとつては、社會の本質は確固不動である。唯、要は其の表面に漂ふ弊害のみを除去すれば足りるのである。

理想社會の可能性に關しては、マルサスは一歩を讓つた。しかし乍ら、現存社會の不變性といふ事に關しては、一彼は一歩もゆづりはしなかつた。そこで、問題は、社會的變革を伴はずして、現存社會より一切の弊害を如何にして除去し、理想社會に移行するかといふ——即ち理想社會實現の手段が、第二に問題となるのである。

ゴッドウィン、コンドルゼーを初め當時の急進社會主義者は、かゝる社會的弊害をもつて、その社會制度そのものに附隨してゐるものであると考へ、從つて社會の本質を改革することなしに、社會的弊害の改善を論ずることは絶對に出來ぬと主張する。しかるに、マルサスには「貧困」「罪惡」を除去する方法は、決して「社會制度」の變革による可きものではなくして、正に個人が、「道德的抑制」を行ひ得るや否やに繫つてゐるのであつた。彼は大膽にも云ふ。

「…全體の幸福は個人の幸福の結果たるべきものであり、從つて先づ個人より始まるべきものである。協同は全く不必要である。一歩一歩が有效なのである。忠實に自己の義務を遂行する人は、他に幾人失敗する人があつた所で、その成果を悉く獲り入れる。此の義務は、如何に才能の乏しい人にも理解が出來る。それは唯だ、扶養の途なき子供を生んではならぬと云ふだけの事である…若し彼が自己の子供を養ひ得なければ、子供は餓死せねばならぬ。又若し子供を養ひ得ない事が殆ど確實に判つて居るのに、之れを冒して迄も結婚すれば彼は斯くの如くして妻子の上に齎す一切の罪に對して責任を負はねばならぬ。結婚すれば當然子供が生れて來ると思はねばならぬから、勤勉と節約とに依つて是等の子供を養ひ得る地位に達するまで結婚を延期する事は、明かに彼の利益であり、大いに彼の幸福を增進するであらう。」（人口理論再版）

二人の子供を辛じて養ひ得る程度の賃銀を有する者が、一度結婚生活に入つて五人六人の子供を儲けるとすれば、勿論見る影もない境遇に沈倫することは當然であらう。この時彼は、先づ賃銀の安い事を訴へる。次に教區で彼を扶助する義務を怠つてゐることを批難する。つゞいて、有り餘る財産を持ち乍ら、彼に與へようともしない富者をせめる。更に彼は土地生産物の充分なる分前を與へぬ不公平なる社會組織に對して不平を鳴らす。最後に、彼をかくの如き境遇の中に生活すべしと指定した天帝の配劑を、恐らくは非難することであらう。がしかし、マルサスによれば、彼は眞に不幸の因つて來る場所には、未だ氣付かずに居るのである。即ち、その人は、自分自身には、絶對に罪がないと考へてゐるのであらうが、事實、大部分の罪は、彼自身が負はねば成らぬのである。

マルサスは、理想社會建設への手段として道德的抑制を提唱する。しかも、「道德的抑制」の描入によつて、人口論初版においておぼろげ乍ら主張せられてゐた貧困の「個人責任論」は、いよ〳〵明確なる型をとつて現れて來たわけである。

マルサスは、理想社會への道として、各個人に獨身を强要する。

「以上に於て想像したやうな社會に於ては、一部の男女は生涯の初期の多くを獨身狀態に過す必要があらう。そして若し之が普く行はれゝば、之は確かに遙かにより大なる人員に對して後に結婚する餘地を作るもので、斯くて、全體として見れば、生涯を獨身に過すべく運命づけられた人の數は少くなるであらう。……愛情は、今日餘りにも屢々見られるやうに、若い頃の淫樂に依つて涸渴せしめられる代りに、後に至つてより輝ける、より純眞なより確固たる焰となつて燃え上るやう、暫しの間抑制されるに過ぎないであらう。そして結婚狀態の幸福は、單に一時的耽溺の手段を提供するものではなく、勤勉と德との賞與として、又純正不變の愛着の報償として仰望されるであらう。」

マルサスは、「純潔の美德」として獨身生活を賞揚し、それが個人としても、又社會全體としても、一般社會的弊害を除去し、社會を理想に近づけるにいかに役立つものであるかを力說する。それと共に、社會的弊害に對する責任は、いよ〳〵重く個人の双肩へとおちかゝつて來たのである。

かくて、初版における貧困の宿命觀は著しい讓步をなしたが、同時に、それは貧困の責任を個人の間に分擔せしめ、云ひ換へれば、初版において消極的に表明せられてゐた個人責任論は、こゝに擴大せられ、積極的に主張せられた。初版と再版とにおける「人類の幸福」に對するマルサスの態度は、これを個人的に見れば、「修正」せられたのであらうかも知れぬが、しかし社會的意義においては、實に「貧困」の「個人的責任」といふ線に沿つての「發展」と云はるべきものである。

かゝる間に、英吉利勞働階級の狀態は、日一日と悲慘となり、その神經は尖銳化して行つた。チヤアティズム運動は、その伏翼期を脫して、今や廣範にわたる大衆運動と化し、その目的を貫徹せんがためには、幾多の艱難も犧牲をも敢へて忍ばんとする政治鬪爭と化して行く。こゝに於て、合法的に勞働組合や政治結社や教育協會を作るよりも、むしろ暴動的に、鬪爭的に秘密結社を結んで、陰謀を企てんとする傾向さへも著しくなつて行つた。

かくの如く、半ば意識的となつた急進的な階級鬪爭理論に對抗するに「神の攝理」「大自然の法則」といふやうな宗教的な、神祕的な宿命論をもつてする事は、最早、不可能となつたのではあるまいか。惠みも、罪も、均しく下す可き筈である神・自然は、マルサスによれば、不公平なる制裁を、勞働階級の上にのみ下して、しかも恬然として「努力への刺戟」なりと說明する。しかしながら、半ば自覺したる當時の勞働階級は、自分等だけを「罪の子」と見做

さるゝことに、最早承服することは、絶對出來なかつた。一體、「神の攝理」が自分等の上にだけ――少くとも常に一番先きに自分等の上に襲ひかゝつて來なければ成らない理由はどこにあるのか。その原因は、何んなのであらうか。

かくて、マルサス人口原理への攻擊、反駁は、同時に英吉利資本家階級とその基底への批判となつて行つた。この批判に對しては、更にヨリ徹底したる防壁が必要となるに至つた。マルサス自身も又　初版における冷酷無情なる態度を放擲して、「道德的抑制」の一句を描入した。しかし、尙ほ、彼は古き道德的壕圍氣から完全に脫出することは出來なかつた。彼は、道德的抑制を以つて、嚴格なる獨身生活と解する。それは、あたかも敬虔なる中世僧院の尼僧が守れば、守り得た戒律であつた。しかし、今や、法皇の權威の消れゆく市民社會において、果してそれを萬人は守り得らるゝであらうか。マルサスは、この「純潔の美德」を中心とした戒律から敢然立ち出でゝ、まつはるものゝない充實した肉體的解放と、性の飛躍が完全にゆるさる可き市民社會の中へ入り込むことに對して、その信念が許されなかつた。ローゼンベルグは次の如く評する。「マルサスは當時の大多數の經濟學者と異りブルジョア化した土地貴族、すでにブルジョア的生產樣式と完全に妥協してゐるが、ただそこから自分にとつて最大の利益を引出さんとする土地貴族の紛れもない代表者であつた。」

その批判の當否は別として、少くとも、マルサスにとつては、「道德的抑制」から更に一歩を進める事は、最早到底なし得なかつたのである。こゝに、彼の繼承者はこの點を出發點として、「人類の幸福」を追求することゝなつた。

三

貧困の存在、及びそれが果たす社會的意義に關するマルサスの宿命論から、超人的餘韻を取り去つて、自由主義組織に即應した理論となしたるものが社會ダーヴィニズムであつたとしたなれば、「純潔の德」を中心とした貧困回避論にまつはる僧院的戒律をぬぐひ去つて、個人主義、効利主義なるものに移行せしめたものは、實に新マルサス主義であつたのであらう。

初版における秋霜烈日たるが如き態度をやゝ改めたマルサスは、貧困回避の唯一の策として、「道德的抑制」を主張する。

「青春期と、各人が敢へて結婚してもよい時期との間の期間は、假定に從つて、嚴重な純潔の裡に過されねばならぬ。蓋し純潔の法則を犯せば、必ず弊害を生ずるからである。」（伊藤・寺尾譯本　人口論三四六頁）

マルサスは、「純潔の德」を中心としたる嚴重なる禁欲生活以外の一切のものを、「道德的抑制」の中にさしはさむ事を、嚴然として拒否する。けだし、それは、男性に對する美德として、女性に對する品位として、所定の期間は兩性相ふるゝことなく過す可きなのであつた。

「子女の出生を阻碍する亂交の如きものの結果は、明かに最善の心情を弱め、且つ著しく女性の性格を墮落せしめる。そして他の一切の性交も、不當の手段を用ひぬ限り、結婚と同じく多數の子女を社會に齎すものであり、是等の子女が社會の重荷となる虞れは遙かに多いであらう。

斯くの如く考へて見れば　純潔の德は、或る人々の想像するが如く、人工的社會の强制的產物ではなく、實は自然と理性との中に最も眞實にして鞏固な基礎を持つものである。蓋し明かに之は、人口原則より爾く層々結果する罪惡と困窮とを回避する唯一の道德的手段だからである。」（前揭書同頁）

マルサスの信念よりすれば、男性と女性との肉體が些かたりとも接することは、とりも直さず姙娠の可能性をふ

くむものであり、若しも、この場合、かゝる姙娠を防止するために何等かの行爲を採るとするなれば、それは一切兩性の品德を汚すものであり、又、神に對する冒瀆であつた。こゝに、貧困を逃れんとする者は、男女共、華やかな人生の初期を孤獨に過さねば成らぬことゝなる。

「……一部の男女は生涯の初期の多くを獨身狀態に過す必要があらう。そして若し之が普く行はれゝば、之は確かに遙かにより大なる人員に對して後に結婚する餘地を作るもので、斯くて、全體として見れば、生涯を獨身に過すべく運命づけられた人の數は少くなるであらう。」（前掲書三四六―三四七頁）

彼の所言の如く、交接を許して、しかもその結果を阻むことは、自然の順理に逆ひ、人間の德性を墮落せしむるものではある。がしかし、やがては獨身の生活をつゞけねば成らぬ人の數は減少するであらうかも知れぬが、それは「純潔の德」の效果が普く行き渉つた曉のことである故に、それ以前における一般男女が、果してマルサスが說得するが如くに、最も渴望せる「生涯の初期」において、禁欲狀態を續け得られるであらうか。萬一、守り通すことが出來ぬとしたならば、「貧困」からは、絕對に逃れ出ずることは出來なくなり、云ひ代へれば、大自然の法則は、罪惡か貧困の中に、人類を追ひやることゝなるであらう。

「道德的抑制」の描入によつて、貧困の個人的責任は明示された。しかしながら、「道德的抑制」は果して行ひ得られるものであらうか。若しも、一般に行ひ得られぬことであるなれば、それは、初版における貧困の宿命觀と、その結果において、いさゝかも變る所は無いわけではあるまいか。

「純潔の德」を中心として、攻擊する者も、される者も、共に等しく基督敎々義の啓示する權威が漸次薄れゆく、市民社會への過度期の內に呼吸してゐる人々であつてみれば、たとへ如何程、大自然法則から生ずる弊害をまぬかれるためには絕對に必要であるとした所で、事實、「道德的抑制」の實行は、社會一般にとつては不可能であり、これに對する贊否兩論は、實踐からみて對峙せざるを得なかつた。

マルサスも又、これを認める。しかも、彼は傳統的道德を固執して、あくまでも自說をまげない。

「道德的抑制の困難といふことが、恐らくこの說に對する反駁とされるであらう。基督敎の權威を承認しない人に對しては、余は唯だ、最も愼重な研究の後、この德は、これなくんば、一般的自然法則より結果すべき或る害惡を避ける爲に絕對的に必要と思はれると云ふ外はない。」（前掲書三五一頁）

マルサスは、當時における效利主義思想家の一人に數へられる。その思想は、確かに進步的な役割をも果した。しかし乍ら、一度彼の思想が、性道德の問題にふれるや否や、彼は斷然、效利主義とは袖を分つて、あくまでも傳統的慣習を固執するのであつた。無分別なる結婚は、彼がいましめる所ではあるが、既婚者が、意識してその家族を制限することは、彼の採らざる所であつた。

されば、徹底せる效利主義者より見るなれば、マルサスの「貧困責任論」は、甚だ中途半端な、微溫的なものであつた。

「マルサスは、貧困及び罪惡の主因が過剩人口なる旨を確認したけれども、かゝる尨大なる弊害が、正に喜ばしからざる方策によつて救濟せられるといふ結論を下す事は出來なかつた。されば、以後なさねば成らぬ事は、同時代の一層急進的なる人々にとつて、彼が立ち止りし點を更におし進め、最少の弊害を拂つて最大の善美をあぐる理想を追求する事である……」（フィールド、人口論集二〇八頁）

道德的抑制によつて、貧困の原因が個人の双肩にある旨を朧氣乍ら暗示して、一步を前進せしめたる貧困回避論

は、更に進んで、徹底せる、貧困の個人責任論にまで發展せしめられなければ成らない。そしてその使命は、新マルサス主義によつて果された。

「要約すれば、人口法則とは、『生物界全般を通じて、生活資料よりも速かに增加する傾向がある』をいふのである。自然は、自ら支持し得られる以上に生命を作り出す。そこで、過剩した生命は、食物の缺乏のためにその跡を斷れる。」（Annie Besant: The Law of Population: its Consequences and its Bearing upon Human Conduct and Morals 1889 pg 6）

マルサスによつて呈示せられたる前提は、新マルサス主義者によつて、全部無修正で承認せられる。しかし乍ら、この前提から必然發生する激烈なる人口の壓力を、食糧と均衡せしむるものとしてマルサスが揭げたる諸要因の內、彼等が强調する所は、殺兒・棄兒・飢饉・流行病・戰爭等をふくめたる所謂「罪惡」と「貧困」とであつた。それは、文明の進歩とは逆に――即ち、社會が進歩すればする程、益々烈しく作用することに成るのである。

「かくの如きが、人口法則の若干の影響である。生產力は、引き續く破壞によつて制壓せられ、出生數は死亡數によつて均衡を保たれる。人口は增加しようと努めるが、生活資料の缺乏は、これを擊退する、そこで男も女も子供も、おそる可き鬪爭の中に死に去つて行く。文明が進歩すれば、進歩する程、事態は益々絕望的となつてくる。Dr Hardinge Giffard が過剩人口の防止を託したる「自然並に神」によつて課せられたる制限は、科學並に文明によつて、逐次除去せられては來た。戰爭は、仲裁々判に置き代へられるであらう。そして、その犧牲と成つたかもしれなかつた人々は、家庭の父となるであらう。衞生知識は、衞生上の改善をもたらすであらう。會て、黑死病がなしたるが如く、チブス及び痘瘡は、無くなるであらう。子供は、幼年期には死なゝくなり、人間の平均壽命は延長するであらう。生命を破壞する「自然並に神」による制限は、生命を保持する科學並に理性による方策と對應され、人口は次第々々に急速に、增加するに至るであらう。……さらば、我々はこの最後の破局をまぬかれるために、積極的制限を奬勵さす可きであるか？　戰爭を煽動す可きであるか？　衞生上の改善を阻止す可きであるか？　甘んじて病死さす可きであるか？　幼兒を見殺しにする事を許す可きであるか？　餓者に對する援助を拒絕す可きであるか？　これ等の制限は「自然的」ではあらうが、しかし人間的ではない。それ等は「神意」ではあらうけれども、「合理的」ではないのだ。この瀨戸端にあたつて、科學は我々にとつて、何の助けにも成らぬのであるか？　理性は、この難問に何の解答をも與へぬのか？　思慮分別は、窮民救助の何等方策とはならぬのであらうか？」（A. Besant: Ibid: pg 25-26）

新マルサス主義者によれば、これまでの文明の進歩は、社會上の弊害の一面を改善することによつて、人口の增加をもたらすけれども、それは人口の調節を考慮に入れてゐないために、社會的弊害の他の面を、それ丈け增加せしめることゝなるのである。

動植物界にあつては、食糧に對する生存のための鬪爭は防止することが出來ずして、一部が餓死するか生贄に成るかによつて、社會上の均衡は保たれることゝなるのである。しかしながら、人類は、――すぐれたる理性をもち、文明と呼ばるゝ發達せる生活段階にまで入りこんでゐる人類は、あさましい生存鬪爭に、甘んじて身をまかせてゐなければ成らぬのであらうか。理性と科學とは、新マルサス主義者によつて、力强く、呼びさまされるのである。

いかなる社會狀況の下にあつても、貧困と罪惡より逃れ出ずる唯一の手段は、何等の磨擦をも生ずることなしに、現存食糧に對して總人口數を均衡せしめる事のみである。かくて、マルサスが提案したる所のものは「道德的抑制」

である。しかるに、「道德的抑制」とは、畢竟「婚姻の延期」であり、「獨身」の强要であり、僧侶的禁欲の典型である「純潔の德」なのであるが、キリスト教義の規範から脫し、中世封建社會の道德から解放されんとしてゐる人々に對して、これは一體如何なる意義を持つのであらうか。

「この豫防的制限は、確かに、有效なるものではあらうか、しかし、重大にして、致命的なる反對論に道を開くことゝなり、單に一組の罪惡に代ふるに、他の一組を以てするのみとなるであらう。若し、晩婚が一般に實行せられるならば、最も悲しむべき諸結果が生ずるであらう。結婚が延期されればされる程、賣淫が益々廣まつてゆく。……賣淫といふ事は、保有することなく、努めて撲滅させなくては成らぬ惡弊ではあるが、しかも、一般に採用せられたる晩婚は、確かに、これを永續させるであらう。夜の幕りの下りた大都會の路上の光景は、延期されたる結婚の結果なのである。しかも結婚が延期せられるのは、何等か團樂の內に、大家族を養つてゆく事が、次第々々に困難になつてきたためなのである。」（A. Besant: Ibid. p. 27）

キリスト教の精神的權威は失墮し、單に形骸のみの信仰と化し去つた時代においては、「道德的抑制」もまた、マルサスが命ずるが如き、心からなる「純潔の德」としてゞはなく、單に形式上の「婚姻の延期」としてのみ理解せられるが故に、事實としての情慾は、概ね橫道にそれて滿たされる。こゝに、貧困をふせがんとして企ろまれたる、マルサスの提案は、はからずも、他の一群の罪惡を作り出す結果と成つたのである。

「人口過剩の弊害の救濟策として用ふるその價値を重視して、實際、獨身を續けてゐる人々に對する晩婚から生ずる弊害は、輕視されてはならない。男にとつても、女にとつても獨身といふ事は、不自然である。あらゆる肉體上の要求は、それに適當なる滿足を必要とする。されば、獨身は、自然法則の無視である。肉體を賤む禁欲主義は、自然を侮辱するものであり、自然に對する反逆である。完全なる女らしさの典型として、處女性を主張する道德は、不自然である。自然と調和してゐるためには、男女は夫婦であり、父母であらねば成らない。そして自然が中性を作り出すまでは、いつまでも獨身は、不具の表象たるであらう。」（A. Besant: Ibid. pg. 28）

こゝに、獨身生活がもたらす諸弊害が、いかに甚大なるものであるか、獨身者と既婚者との生理的狀況――例へば、平均壽命、疾病率等々――を比較してみれば、明白であると、新マルサス主義者は斷定する。ひるがへつて、現在の一般社會の狀態はどうであらうか。

「幸にも、晩婚はいかなる社會に於ても、一般には實行されては居らない。男女の大多數は、戀情最もこまやかに、觸感最も鋭き華やかなる青春時代を、たつた一人で過ごし、然かも人生既に半をすぎ、女ざかりも容色の美も共に中年となつて色あせたる頃にのみ結婚するといふ樣な事には、決して同意せぬであらう。」（A. Besant: Ibid. pg. 29）

しかし乍ら、道德的抑制の必要を認め、これを遵守し續けられる樣な思慮もあり、分別もある人々には晩婚が行はれ、無分別なる一般窮民の間には早婚の風が、夙に喜び迎へられるとしたならば、一體どんな結果に成るのであらうか。社會上最も優秀にして智識ある人々は獨身であり、從つて子供がなく、最も思慮に乏しく不注意なる人々は婚姻して、大家族を持つことゝなる。正に現在見たまゝの現象である。

これでは、折角、思慮ある人々が、賃銀に比較して不當なる大家族をもつことが、貧困へおち入る原因だと氣が付いて、結婚をさし控へても、結局、無分別者と、その家族を養つてやるための高率なる救貧稅を支拂ふ結果と成つてしまふのである。實に、不合理ではあるまいか？　こゝに、マルサスの示した豫防的制限は、より賢明なる解決策に、とつて代られなければ成らない。新マルサス主義者は提唱する。

「過剰人口と晩婚の弊害とを同時に認める最近の思想家等は Scylla と Charybdis とを共に避けられる一筋の道を見出さうと努め、かくて早婚と小家族とを提唱する。」（A. Besant: Ibid. pg. 30）

結婚から生ずる多數の子女こそ、貧困に一家を導く原因であるとするなれば、小家族のまゝで居り得る方策さへ見出し得た時には、早婚もまた、人口問題にとつて、何等の影響も與へない事となる。されば、こゝに殘されたる問題は、早婚と小家族――云ひ代へれば婚姻して、その結果を生ぜしめない方法に關する研究である。いかにして、全ての花を、仇花となすか？　こゝに、新マルサス主義者は、近代自然科學に援護を求め、進歩發達したる醫學の重要性を強調する。

「既に提示せられたる幾多の豫防的制限は有するが、斯る複雜なる問題が一層研究せられん事は望まれる。而も、更に望む可き事大なるは、ヨリ多くの醫師が、この生理學の重要なる部門の研究に、その身を委ねられん事である。この道の主なる困難は、一體豫防的制限といふものが、卑猥であるとなす誤れる概念である。そこで、この問題を卒直に取扱ふ事から生ずる不評判に直面して行く勇氣を持ち合せてゐる醫師は、甚だ僅少なのである。」（Ibid. p 31）

かくて、斯る方面の研究は遲々として進まず、世間一般の誤解も一掃せられずに、切角の「賢明なる解決策」も何殺社會の受け入れる所とならぬのである。

こゝに、新マルサス主義者は、大膽且つ卒直に、種々なる醫學上の技術を紹介し、宣傳するのである。

新マルサス主義は、確固たる自然科學の土臺の上に、マルサスの貧困責任論を据え付けた。マルサスにあつては、斯る貧困よりの回避策を、全然各人の「心理作用」――云ひ換へれば、「忍耐」の程度に依存せしめてゐる。そこで、各人が有する「心理狀態」並に、斯る心理狀態を作り上げたる萬般の要因の複雜性は、マルサスの貧困に對する所謂「個人責任論」を甚だしく主觀的なるものとしてしまつた。然るに新マルサス主義の主張する所は、各人が等しく行ひ得る醫學上の技術である。それは習得してしまへば、誰でも充分にその效果を享受することが出來るのであるから、各人は、貧困回避の困難如何を論ずる必要がなくなるのである。

新マルサス主義の熱烈なる宣傳は、これに關聯する醫學上の知識を普及せしめ、彼等が配給する廉價なる用具は、誰もが、これを入手する事を得せしめ、かくて、その主張を實行し得る可能性は甚だ大となつて、こゝに各人の負ふ可き貧困の責任は、確然分割せられて、その双肩へとのせかけられたのである。

四

以上の論述において、筆者は、新マルサス主義運動の思想的背景に一瞥を與へた。新マルサス主義とは、その文字の示すが如く、マルサス人口理論の一の發展であり、「貧困責任論」に關する社會的要求に應じたるその修正であると云ひ得る。

然るに、マルサス主義と新マルサス主義とは、往々にして、全然別個のものであると見做されてゐる。

「新マルサス主義は、一言にして云へば、產兒制限論である。マルサスが「人口論」第二版に於て豫防的抑制の中で說いた「不正行爲伴ふ」ものに屬し、勿論、罪惡の部類に分類せられるのであるが、嚴密に云つてマルサスの名を冠する事の適當であるかどうかは明らかでない。」（カル・サウンダアス人口問題研究二〇四頁）

「マルサスの人口論は、經濟的見地に立脚してゐたに拘らず、新マルサス主義は、寧ろ、文化的根據に因つてゐるものであると云ふべきではあるまいか」（同書二〇六頁）

誠に、新マルサス主義運動及び宣傳の主たる對象とする所は、現在に於ては、人類の質的向上であり、從つて又、

その基調とする所も經濟的理由ではなくして、文化的理由なのである、とは事實である。それは、思想史的意義よりも、むしろ技術的性能が論ぜられねば成らぬ。だがしかし、それだからと云つて、新マルサス主義といふ運動が首尾一貫して、斯る傾向をもつてゐたと考へる事は、正しくないのである。新マルサス主義を靜態的に見ることは誤りである。マルサスの思想の修正として現れたる新マルサス主義も又、一つの流動したる思想である以上は、その時代の制約によつて漸次、順應・發展變化する動態的意義を持つてゐる筈である。從つて又、その本質も、新マルサス主義が果す社會的任務によつて決せねば成らぬ問題である。

A　改良主義的イデオロギー

新マルサス主義者は、人口制限の必要なる理由についてはこれをマルサス並にマルサス主義者の說くにまかせ、自分等は主として、彼の道德的抑制の無力にして、且つ却つて弊害の生じ勝ちなる所以と、避姙の方法の有效無害にして、且つ之れを不道德的なりと認むべき理由の存在せざる所以を力說するに努めたのである。彼等が、人口法則といふ自然律の絕對支配を肯定しながら、然も、その支配から逃れ得られる人爲的手段の發見に唯營々と努めたる彼等の胸にをどる一條の信念は、一體何であらうか。實に烈々たる「貧困階級」への同情の念に外ならなかつた。

彼等は、貧民の悲慘なる狀態に、心からなる憫憐の情をよせ、その改善について樣々の考量をめぐらした。そして、遂にマルサスの理論に對して、醫學の武器を提供したのである。

初期新マルサス主義者、ブレース・オーエン・ブラットローフ・ベザント等は、自ら親しく「貧困階級」の辛酸をなめ、その生活については熟知してゐた。彼等の胸には、社會革新の意緒すらも浮んだのである。しかしながら、社會の革新せられる時期は一體何時なのであらうか、果してそれ迄窮乏におち入つた人々を放任しておいても良からうか。彼等の純情は、これを許さなかつた。そして、革新の時期に關する彼等の悲觀的態度は、その情熱をまた、ひたむきに個々の貧困の驅除にと赴かしめたのである。

「吾々は、全力を盡して社會革新に努むると共に、同時に家族制限の原理を採り上げるといふ事は緊要なることである。賴みにならぬ、鬪爭力を失つた大衆は、資本家との彼等の抗爭にあたつて、勞働者を阻ぐるものである。然も子供等が生長するに從つて、彼等は無統制なる過剩勞働の廣大なる「外廓」を增加して行き、之を利用する事によつて、資本家は殆どいつも、長期に涉るストライキを行ふ勞働者を壞滅せしめる事が出來るのである。」（A. Besant: Ibid. pg. 45）

新マルサス主義者が、一度その全幅的信賴をよせてゐた人口原理と稱する自然律の支配を否定して、社會制度と密接なる關聯を有する歷史的人口法則を取り上げるとしたなれば、彼等は最早、新マルサス主義者ではあり得ないわけである。しかし乍ら、彼等の環境、その敎養、そして又その信條は、彼等をして驀進、社會の改造に赴かしむる事を阻んでしまふ。そして、「貧困」に對するあふれる如き情熱は、その根底にまでは至らずして、唯社會改革への一要石として、一個の重要なる武器としての役目を果して滿足する。

「私は、更に遙かなる善を求めて努力してゐる一時的鎭靜劑に、吾が社會主義戰友諸君が反對せられぬ事を、心から要望する。我々は、現在の我々の不十分なる財源に關する苦惱を輕減せしむるを以て、社會主義に對し、ヨリ良き事を果してゐるので、ヨリ惡き事を行つてはゐない筈である。我等が戰ふ敵に對して、我々は入手出來るあらゆる武器を用ひねば成らぬ。然も最も有效なる武器は、家族の制限である。かくて我等は、資本家より、彼等の利益の一部を爲す彼の密集した勞働市場を奪ひ取る」（A. Besant: Ibid. pg. 46）

新マルサス主義者の眞意が那邊にあつたにもせよ兎も角も、一應彼等は、社會の恒久性を認めた結果となつた。そして、その上に立つてその中から人爲的に、發生し來る弊害を摘出しやうとする。こゝに彼等の理論的發展は止まり、その主たる任務は、ヨリ多くの同胞に、斯る武器を提供しその用法を習得せしむる爲、廣範且つ有力なる宣傳を行ふことに限られた。彼等は云ふ。

「最後の勝利は確實ではあるが、勝利の時期は、我々の忍耐並に勇氣に依存する。」(A. Besant: Ibid. pg. 46)

彼等の情熱は、最後の勝利にまでとゞいてゐたとしても、新マルサス主嚢の理論と實行は、既存社會の全面的肯定の上に立つた弊害の摘出にすぎない。一基本社會の特殊法則には手をふるゝ事なく、かゝる法則からもたらされる社會構成層間の流動には目も止めずに、わずかに浮び上つた弊害の摘出に努力する改善論が、結局一のユートピアである事は、いなむことは出來ぬ。こゝに新マルサス主義者のイデオロギーは、所詮、改良主義的なるものゝ埒外に出る事は出來なかつた。

「……新マルサス論者の多くのものは、純正マルサス說に異說を立てゝ說く。今日の社會の罪惡と窮乏とは、人口過剩の結果ではない。少なくともそれのみの結果ではない。社會組織の缺陷も亦その一部の原因であると。併しさういひながら彼等は、社會組織を變更するなどゝいふことは到底出來ない相談であるから、社會を救ふにはたゞ產兒制限の一方法あるのみである。若しさうしなければ社會の幸福を向上せしむる筈の人口增加は、反對に社會の窮乏に變ずるであらう、と主張するのである。」(K. Kauthy: Vermehrung und Entwicklung 1921 S. 1. 邦譯松下芳男、マルキシズムの人口論三―四頁)

B)〔自由放任的イデオロギー

新マルサス主義者自身が說く個人的主張は、明らかに資本主義社會內におけるブチ・ブルジョア的感情論であつたとしたなれば、斯る社會の基本性から、少くとも遊離してゐるセンチメンタリズムが、一體何故、かくまで社會的支持を受けることが出來たのであらう。新マルサス主義が、一般社會內に根强く立ち上つた根底は、一體どこにあるのであらうか。こゝに於て、新マルサス主義は、主觀的本質を離脫し、客觀的な本質を具備する。それは、個人的な意見ではなくして、一の社會思想となるわけである。

產業革命の波動が、次第々々に社會の各方面に深く浸滲してゆくに從つて、市民社會がふくんでゐた封建的餘香はうすれてゆき、これに代つて第四階級の勢力は著しく擡頭してきた。チヤァチズム運動は、その伏翼期を脫して、廣範なる大衆運動となり、その目的貫徹のためには、幾多の艱難と犧牲とを忍ばんとする政治鬪爭と化していつた。

かくの如く、漸次悲慘なる狀態におち込んでゆく英吉利勞働階級の中心的議題となつたものは「貧困」であつた。一體「貧困」は、何故發生するのか。その眞因は何んであるか。實に、人口法則と云ふ自然律であると、マルサスは云ふ。しかし乍ら、半ば意識したる勞働大衆は、自分だけを「罪の子」と看做るゝことに承服出來ない。マルサスは、一步を進めて、「道德的抑制」を描入して云ふ。それは、各人が、「道德的抑制」を行ひ得るや否やによつて發生するが故に、個人が責任を負ふ可きであると。しかし乍ら、道德的抑制は最早社會の大部分が、之を實行することの出來ぬ行爲なのである。これを以つては、到底貧困を個人の責任と斷定することは至難である。

新マルサス主義は、こゝに於て提案する。貧困は、各人が養ひ切れぬ家族をもつが故に生ずるのである。故に、その責任は各人が負ふ可きである。何となれば、新マルサス主義が普及し、宣傳する技術を習得する事は容易であり、その廉價なる用具は、現に貧困におち入つてゐる人々にも容易に入手することが出來る程なのであるから、貧

困におち入る、おち入らぬは、各人の「意思」如何にあるのである。かくて、マルサスの「貧困責任論」は、新マルサス主義によつて、「個人責任論」たる態度が明白にされた。「貧困」の責任は、一切個人に歸屬する。

子女を生むことは、勿論、個人の權利である。しかし乍ら、同時に、その結果「貧困」におち入ることも、個人の「責任」である。かゝる論理は、個人の權利と義務とを明確に享受せしめんとする自由主義・個人主義社會に當然うけ入れられる筈であつた。そして、新マルサス主義は、各國において禮讃され、力强き支持をうけたのである。

思想上における、自由主義と個人主義が、産業資本の制覇と共に確立せられたものであつて見れば、人口論上における自由主義・個人主義は、「社會ダーヴィニズム」および、新マルサス主義なのであらう。

新マルサス主義の社會的本質は、産業資本主義時代における人口學說たるの點にある。こゝに、個人的感情論を脫して、新マルサス主義は社會的性格を把握する。

五

歐洲大戰以後、殊に未曾有の世界經濟恐慌を通じて、世界の社會經濟機構は一變した。そして、各國における個人主義・自由主義的傾向は著しく退潮せしめられたのである。

世界經濟の紐帶が、漸次切り離し難く結び付けられてゐくのに逆比例して、各國は、互に高率なる關稅壁を設定し、嚴重なる通貨・物價・爲替・貿易・金融の諸部面に涉る干涸を行つて、自給自足國家の建設にと狂奔する。それは、消極的には領土の保全であり、積極的にはブロック經濟圈の確保なのである。

會では、廉價なる商品の巨砲をもつて、萬重の城壁をも粉碎し、必要なる販路と資源とを見出すことも出來た近代國家も今や再び、外交と軍備の保證を絕對に必要とすることゝなつた。自由主義時代におけるが如く、貿易を以つて、容易に必要とする物資を入手し、これを賣りさばく事は困難となり、さりとて又、自國一國のみを以て、「自給自足國家」を構成することも不可能なのである。

こゝに、現代國家は、その生存のため、第一に物的資源、第二に、かゝる物的資源を運用し、又確保するための人的資源とを求めてやまない。それは、自給自足國家を構成する物的、人的資源の確保である。

實に、斯る二つの資源の寡多は、とりもなほさず、一國の貧富を決定するものなのであり、一國が富んで居るか、否かは、又、國際場裡における國家及び國民の生存そのものを決定する基本要素なのである。

しからば、如何にして、富國はます〳〵富み、貧國は、貧困からまぬかれることが出來るのであらうか。正に領土の擴張と、人口の增加による外はない。

こゝに貧困に關する問題も、個人的貧困から離れて、國家の貧困を中心として論ぜられねば成らなくなつた。それは、如何にしてより多くの兵士や技師や熟練工を備へ、機械化されたる優勢なる軍隊と、健全なる銃後國民を保有するかである。

かゝる社會的要求に對して、個人間の生存競爭の裡に社會進化をみとめる社會ダーヴィニズム及び家族構成員の量を減ずることに社會全般の福祉を求むる新マルサス主義とは相反するものであつた。かくの如き、個人主義・自由主義に立脚せる「貧困宿命論」及び「貧困責任論」は、「國家の競爭」「國家の貧困」におきかへられなければならない。即ち、前者は、全體主義の戰爭哲學であり、後者は、全體主義人口論である。

即ち曰く

「愚考する所によれば、もし、英吉利に約五、〇〇〇、〇〇〇人だけの人間が住んでゐるとするなれば、英吉利に

は、もつと草ふかき、健康なる土地が有つたであらうと思はれる。しかし乍ら、萬一、私が、その僅か五、〇〇〇、〇〇〇人の一人であつたとしたなれば、私は直ちに外國の侵略の内に屈服するか、若しくは滅亡する運命にあることを覺悟しなければ成らぬのである。されば、我々は如何にすべきか？　我々は屈服ず可きか？　我々は大英帝國を守護せんために、再び戰ふ可きか？　もし、それをしなければ、我々は、大英帝國の如何なる部分を割讓す可きか。若し我々が、領土の一部を割讓せば、その全てを放棄せねば成らぬ筈であるが、一體どうなる云とふのか？　我々の名譽及び威信の毀損は別とするも、我々は帝國の大部分を無くして、やつて行く事が出來るのか？　眞に英吉利人は人口過剰なのか、それとも政策がわるいのか？　何故、我々は、もつと子女を持つことが出來ぬのか？

（R. A. Piddington: The Next British Empire pg. 4-5）

誠に、英吉利の出生率は減退する事次の表の示す通りである。

英蘭・ウエールス人口千人に對する出生率

一八五一——五	三三・九
一八六一——五	三五・一
一八七一——五	三五・五
一八八一——五	三三・五
一八九一——五	三〇・五
一九〇一——五	二八・二
一九一一——一五	二三・六
一九二一——五	一九・九
一九二六——三〇	一六・七

（D. V. Glass: The Struggle for Population Pg. 4）

しかも、その眞因は、實に、新マルサス主義運動に向つて集中せられる。

「多くの人口問題研究家は、有能なる父母が出生率を減ぜしめんと希求するが故に、出生率は減退するのであるといふ點に一致を見てゐる。それは、出産の意識的制限の結果である。そこには、姙娠力即ち産兒能力の喪失に對する何等の證據も存在しない。されば、又、減退が避姙の實行によつてもたらされたものであるといふ點にも一致を見てゐる。そこには、多くの他の原因もあらう。ある諸國では、故意の墮胎が著しく行はれてゐる證據があるし、又醫師産婆も、この國では近來墮胎が次第に行はれる樣になつたと云つている。がしかし、眞に重要なる原因は避姙である。』（G. F. McCleary: The Menace of British Depopulation 1937 pg. 103）

かくの如くにして、國際政治の危機は、國家全體のために、新マルサス主義理論の修正を迫まる。一國家内部における或る部分は、確かに個人的貧困におち入つて苦惱してゐることは事實であるとしても、それをも含めたる一國家全體が、國家的貧困におち入つてゐるがために、國際場裡において生存し續けることが出來なくなつてしまつたとするなれば、結局全國民は破滅せざるを得ぬ筈だ。こゝに、個人的貧困は一時默殺し、貧困に沈淪する人々は、兎も角も暫しの間耐へ忍んで、國家の生存、國家の發展即ち消極的には理想國家の建設、積極的には世界の理想的秩序の回復といふヨリ高き目的に向つてひたすら邁進せねばならぬ。

かゝる風潮の中に、新マルサス主義は、遂に、マルサス人口原理との聯携をたち切り、「貧困回避論」としての使

命をなげうつに至つた。彼等は尙ほも、人口制限の技術を唱導する。しかし乍ら、その對象とする所は、最早「貧困階級」ではなくして、「劣性人口」なのである。それは、貧困を救濟するための武器ではなくして、一國民中の劣種を斷滅し、質の向上を計るための保健・優性上の武器となつた。新マルサス主義は、人口の量から質へと、その對象を移行することによつて、辛じて、現在の社會にその存在を許容せられたのである。それは最早、社會思想としてゞはなく、實に社會科學の範圍を遠く逸脫して、純然たる自然科學の中に逃避してしまつたのである。こゝに現代全體主義思潮の中における新マルサス主義の性格があるのである、新マルサス主義は、社會科學者の手を離れたるが故に、人口理論としての我々の研究も終止するわけである。そして、これに代るものは、實にファッショ的人口論、もしくは全體主義人口理論と稱す可きものであるが、この事については、稿をあらため之れを他日にゆづる事とする。

希臘及び羅馬經濟學

（ギリシヤ・ラテン學會發會記念公開講演會講演——昭和十四年四月二十七日、慶應義塾大學教室に於いて）

高橋誠一郎

一

今日、多望なる前途を有するギリシヤ・ラテン學會の光輝ある發會記念講演會に於いて「希臘及び羅馬經濟學」の題下に一席の講演を行ふの名譽を余に與へられたることを厚く會長及び會員諸君に向つて感謝すると共に、余の淺學無識なる希臘及び羅馬の經濟思想及び經濟學說に關して崩壞なる造詣を有することなきは勿論、近年殊に此の方面の研鑽を怠り、近く學得せる所のものを提げて此の壇上に立つことを得ず、纔かに往年修め得たる貧少なる舊知識の一端を披露して其の責を塞ぐに過ぎざることを深く遺憾とする。

現在の形態に於ける經濟學は必然的に近代思想の創造物である。吾人は近世經濟學に對する古代哲學の寄與を極めて輕視する。吾人は近世の經濟學が其の起源をルネサンスの時代に有するものであり、近世經濟思想の黎明期が